

2019年度拡大経営会議について

2019年4月24日
公益財団法人鉄道総合技術研究所

公益財団法人鉄道総合技術研究所（以下、鉄道総研）は、下記のとおり、管理職員 130名を集めた「2019年度拡大経営会議」を開催いたしましたのでお知らせいたします。会議では、年度初にあたって役員および各研究部・研究センター長が今年度の事業計画を報告し、全員で課題を共有し解決に向けて取り組むべき事項を確認するとともに、「鉄道の未来を創る研究開発」というテーマで役員による訓話および参加者によるディスカッションを行いました。

会議は、正田英介会長の訓示、熊谷則道理事長による訓話、常勤役員による鉄道の未来を創る研究開発に関する訓話、ならびに研究部長等による各研究部等の事業計画および次の30年を創る研究開発についての報告を行いました。その後、テーマディスカッションにおいて鉄道の未来を創るために何をすべきかについて議論を行いました。

記

開催日時：2019年4月18日（木） 15時00分から17時30分

開催場所：パレスホテル立川（東京都立川市）

参加者：役員、部門長、研究部長等、課長、研究室長ほか 計130名

議 事

1. 訓示 会長 正田英介
2. 2019年度業務の開始並びに未来を創る研究開発について 理事長 熊谷則道
3. 鉄道の未来を創る研究開発
 - (1) 事業展開と目標
 - ①持続可能な研究所の運営に向けて 専務理事 澤井 潔
 - ②鉄道の未来を創る研究開発 専務理事 渡辺郁夫
 - ③国際規格事業の実績と目指す方向について 理事 潮崎俊也
 - (2) 研究部等における鉄道の未来、次の30年を創る研究開発 各研究部長等
 - (3) テーマディスカッション
テーマ「鉄道の未来を創るために何をすべきか」
モデレータ：理事 久保俊一



写真 2019年度拡大経営会議

正田会長訓示要旨

本年は RESEARCH 2020 の最終年度です。お集まりの研究部長・研究室長の皆さんには5年間の研究の成果を明確に発信するという視点から、しっかりと研究・開発された内容を整理し、技術的な位置づけを明示し、成果をしっかりと残すとともに、鉄道関係者や社会に判りやすく伝えて頂くことをお願いしたいと思います。このようなことは改めて言われなくとも当たり前ではないかとお思いでしょうが、本日の議論の主題である「鉄道の未来」と深く関わりがあると考えていますので、あえて申し上げた次第です。

何故かといいますと、「未来」という表現には注意が必要だからです。これが過去にも議論された「20年後の鉄道」とか「50年後の鉄道」などであれば明瞭で、その時点の技術や社会を想像すれば議論できます。悪く言えば、技術や社会の状況には ambiguity (あいまいさ) があるので、勝手なことでも言えるわけです。ところが、「未来」となると問題が難しくなります。日本語はあいまいなので辞書を調べても「未来」の意味は「これから先」「将来」など文学的で不明瞭ですが、外国語は概念を明確に定義するので「future」は、今(話したり、書いたりしている時点)から先の時間軸上の区間と非常に明快に示されています。ここで重要なのは未来を考えるにはその起点としての「今」が明確に定義されていなければならないということです。

Science Fiction であれば、「未来」について自由闊達に思いを奔らせても良いのですが、研究開発の未来を論じるには、皆さんのそれぞれの立場での現在の立ち位置として、その分野の基礎的な学理や内外の研究状態の把握や、鉄道の技術や運用の全般の理解に基づいた、皆さんの研究分野での置かれた状況について確固とした考えが必要です。研究なり、技術の未来がそれを原点として時間軸の延長線上で議論されなければ、未来はふわふわした画餅や空想になってしまいます。また、同時に、状況の理解についても、客観性や冷静さを持って臨まなければ、判断が歪められて、偏った未来になるでしょう。

このような研究開発における立ち位置を理解し、把握することは日常の作業の中でも研究開発を正しく着実に進めるためには大切なことと考えています。しかし、環境の中に埋没して日常の業務に流されてゆくと、自己の立ち位置を常に意識しているというのは中々難しいことでもあります。その意味で最初に申し上げましたように、本年度は5年計画の終了の年という点で非常に良い機会ですので、単なる研究のまとめや一連の流れの中での経過報告ではなく、計画の現時点での意義を再確認しつつ周辺の状況をも評価しながら5年間の研究成果をしっかりと形で整理しておくのは、大切なことであり、未来の基礎を築くものであります。皆さん全体にお話できるこの機会に改めてお願いして、会議を始めるに当たっての私のご挨拶に代えさせていただきます。



写真 訓示を述べる正田会長

熊谷理事長訓話要旨

新しい年度に入り、各部署の事業計画を推進するにあたり、方針について話をします。お手元にある各部門・研究部の事業計画は、よく議論されて作られたものであり熟知されていると思いますが、他の研究部の事業計画をもぜひ見てください。我々から見ると各研究部に色々な風土、文化があります。それがユニークで面白いと思います。他のところを学ぶ材料にさせていただきたいと思います。私達の仕事は創造的であるにも関わらず、ともすると同じ位置に留まりたい、仕組みは変えたくないという欲求が働きます。それでいいのでしょうか？私たちは殻を破ってこそ成長するのではないのでしょうか？皆さん方、そして皆さん方より若い方が殻を破るような仕組みを是非作っていただきたいと思います。それが2019年度の事業計画の根底に流れている精神だと思って是非今一度ここで心に刻んで頂きたいと思います。新しい令和という元号の時代が5月1日からスタートいたします。私達の業務の流れが大きく変わるものではありませんが、31年間の平成の時代を振り返り、そして次の時代に何をするかを考えるのも、節目を迎えた時期として興味深い事ではないかと思えます。企業30年説というのがあります。30年単位で企業を見ると栄枯盛衰の歴史あるいは経緯が見えるわけです。鉄道総研も殻を破り変わって行かなければいけないと思えます。そういう意味で、拡大経営会議のテーマを「鉄道の未来を創る研究開発」としました。2019年は殻を破りチャレンジングに過ごす年度としていただきたいと思います。そして新しいものを作り始める、その瞬間です。現在作成中の次期基本計画 RESEARCH2025には、鉄道総研の全員で新しい知恵を入れていきましょう。

次に、鉄道の未来を創る研究開発については、私達の鉄道はどうなるかということを考えながら進めなければいけません。しかし、50年後に鉄道がどうなっているかを決定づけることはできないと思えます。そうすると、こういう鉄道にしたいという意志を示すことが大事ではないのでしょうか。持続的発展のために、私達は鉄道総研のマネジメントにきちっと責任を持ちます。研究室長をはじめ、研究部長、部門長にはダイナミズム、すなわちダイナミックに研究開発を推進していただきたいと思います。そして鉄道の価値を高めるのだということ、これも一つ殻を破るという事に通じるのではないのでしょうか。最高の品質を社会に出していきましょう。信頼の醸成や鉄道の発展とは、ブランドを作り維持すること、信頼を得ることです。国連の持続可能な開発目標（SDGs）、ここに私達が進む道しるべとしてのヒントがあると思えます。鉄道総研がこのSDGsにどう関わっているのか早速にまとめますので、ぜひ皆さんも注目してください。鉄道は来るべき時代にどのような役割が生じるのか、SDGsはその一つであると思えます。安全性を高めること、ユニバーサルであること、楽しめること、これらが鉄道の楽しさ、面白さであり、鉄道の技術を担う我々の楽しさであると思えます。この時代において、デジタル化や人の育成は欠かせません。そういった意味で、国土のモビリティの一翼を担うという気概を持ちましょうということで、従来の自らの殻、鉄道総研の殻を破って世界に出て行く活動をしていきましょう。



写真 鉄道総研の未来について訓話を行う熊谷理事長

テーマディスカッション要旨

今年度は「鉄道の未来を創るために何をすべきか」をテーマに、「次の30年後の鉄道の未来はどのようになっているのか」「それを実現するために鉄道総研が行うべきことは何か」について、モデレータの久保理事をはじめとする役員と参加者の間で活発なディスカッションが行われました。

参加者からは、30年後の鉄道の未来について「生産年齢人口の減少に応じてロボットやAIの活用が一層進むのではないか」、「ICTに関しては劇的に変化しており、この傾向は今後も続くのではないか」などの意見がありました。予測される変化に対して鉄道総研が行うべきことについては、「オープンイノベーションなどを推進し、変化を正確に捉え、対応する必要がある」、「達成すべき課題の本質を見抜くことができ、殻を破りチャレンジする力を持った技術者集団を維持する必要がある」などの意見がありました。



写真 テーマディスカッションでの質疑